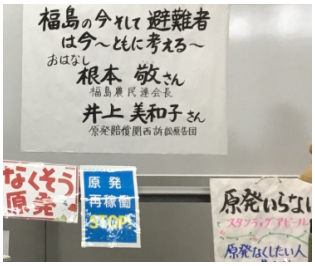
福島は今そして避難者は今～ともに考える

摂津市で開かれた写真の集いに参加した。摂津市には初めて来た。摂津市というと、地方財政論の講義のなかで、国・厚生省を相手にした保育所訴訟で話題にしたところだ。摂津市が国を「せっつ」いて、保育所建設の補助金で裁判を起こしたと話したものだ。



集いでは、まず原発賠償関西訴訟原告団の井上美和子さんが「避難者は今」を語った。井上さんは原発事故後、福島県南相馬から京都に避難してきた。放射能の恐怖から、二人の幼い子どもを守るために、48 時間かけて必死に逃げてきた。あれから 8 年。毎年 3 月頃になると、気が滅入ってしまう。それで、明るい服を着て気分を晴らすのだという。

井上さんは 2 月 21 日の大阪地裁での公判で、原告団を代表して「意見陳述」した。抽選に外れて法廷では聴けなかったが、公判後に弁護士会館で開かれた報告集会の場で、井上さんの「意見陳述」を聴いた。心にせまる訴えをレポートに書いた。もう一度、井上さんの話が聴きたくて集いに参加した。集いの前にレポートを手渡すことができた。

井上さんは話す時間が短いので、避難してから綴った 3 本の詩を読みあげた。福島で過ごしたときの祖母や父との思い出を、たんたんと綴った詩だ。味噌を作るために「豆を煮る」おばあちゃん。出稼ぎに全国を飛び回っていた、父の人生そのものである自宅が、原発事故により解体されることに。せめて自宅庭の紅梅だけは残してけれと頼む井上さん。更地になった土地に紅梅が咲いたなどと、原発事故への怒りが詩にこめられていた。

井上さんは話のまとめとして、裁判長の前で切々と訴えた「意見陳述」を読みあげた。弁護士さんの「代読」を含め、これで 3 回聴くことになる。目を閉じて聴くと、先ほどの詩で語られた福島の風景が見えてくるようであった。

このあと福島県農民連会長の根本敬さんが「次世代への責任を果たすために」と題し、原発ゼロ運動の現状と課題、福島の今を語った。「除染バブル」や汚染土の再利用など、福島だけでなく国土・国民全体の問題として、原発事故をとらえることが大切だと強調した。質疑のなかで甲状腺などの検査や放射能測定などを継続しないと、福島の事故が歴史から消されてしまうと述べた。

この集いを主催したのは「原発ゼロの会・摂津、千里丘(吹田)」。2012 年 11 月から毎月 11 日に、スタンディングアピールを続けてきた。2018 年 3 月 11 日には、初めて阪急摂津市駅から JR 千里丘駅までパレードしたという。草の根の地道な「原発ゼロの会」の活動に元気をもらった。JR 千里丘駅から帰宅したが、意外に近かった。

(2019 年 3 月 22 日)